

ローマ人への手紙8章26-30節 「主ご自身の執り成し」

1A 御霊の執り成し 26-27

2A 父なる神のご計画 28-30

1B 全てを益とされる方 28

2B 御子の形 29-30

本文

ローマ人への手紙8章26節からです。主のご計画、私たちに対するご計画の濃縮ジュースのような箇所に入ります。まず、パウロは、私たちキリスト者が御霊に導かれている者であり、そうであれば神の子どもなのだと話をしました。神によって生まれた者、神に似た者、そして神に聞き従う者であります。これが神が初めに人を造られた時の目的でした。神のものとされ、神に拠り頼み、この方に聞き従い、そして神の造られた全ての物を任されていました。このようにして、神の栄光を彼は現わしていました。キリストの贖いによって、主がこのことを私たちに回復してくださいます。それを神学用語では、「栄化」と呼びます。神の栄光の姿に変えられることです。

その時に、私たちが知らなければいけないのは、私たちにはいつも「呻き」があるということです。神が行われる回復は約束されて、その実体は目に見えない形で私たちは既に受け取っています。私たちは既に永遠の命を得ているし、新しくされ、既に神の子どもです。ところが、まだ回復は完成していないのです。主が戻って来られる時まで、霊的な事柄においては贖われていても、肉体に関わること、目に見えるところにおいてはまだ贖われていない状態が続いています。「主は来られたのだが、まだ来られてない」という中に生きています。既にあるけれども、まだ来ていないのです。ですから、私たちの心の葛藤は激しくなります。

パウロは、このことをキリストご自身が通られた道であり、私たちもまたキリストに結ばれた者であることを話しました。主は父の栄光を持っておられた方ですが、この地上に来られて、苦しみを経た方でした。そしてその苦しみを経たからこそ、死者の中から甦り、昇天され神の右の座に着かれました。そして戻って来られます。同じようにキリストに見いだされた者たちは、古い人が十字架に付けられて死に、葬られ、そして新しい命にあって歩むことができるようになりました。そして、キリストが天から降りて来られる時に私たちは引き上げられ、栄光の姿に変えられます。そしてキリストが地上に戻られる時に、私たちの神の栄光をもって現れます。それが19節にある、「神の子どもたちの現われ」のことです。ですから、私たちがキリストの内にとどまる限り、苦しみがあ、その後には栄光があります。

1A 御霊の執り成し 26-27

そして、その呻きの過程の中で助けてくださる方がおられます。私たちが神の子どもにしてくださ

った、神の御霊ご自身です。

26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。

神の御霊が、「同じようにして」助けてくださると言っていますが、何をもちて同じようにして、なのかと言いますと、二つあります。一つは、私たちは「この望みによって救われています」と 24 節に書かれています。私たちの体が贖われて、神の子どもとして現れるという望みがあり、その望みによって私たちは今を生きることができます。けれども、もう一つあります。その望みが実現するまで、この弱い肉体の中にいる時にも、呻きの中で助けてくださる、ということです。「御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。」とある通りです。

私たちの弱さは、どこに現れるかと言いますと、「どのように祈ったらよいかわからない」というところに現れます。神が、いま置かれている状況の中で、特に苦しみの中で、何を御心としておられるのか、どう祈ったらよいか分らないという弱さがあります。例えば、自分にいつも助けを求めて来る人がいるとします。相談にのってくれ、人生について質問がある、と言ってやって来ます。自分は何回も相談に乗りますが、その人は、話すことが主眼となっており、自分にある問題を解決しようとする気がないように感じます。そのとき、私たちは、自分がその人の話しを聞いてあげるのが、神のみこころなのか、それとも、丁重に、自分でよく考えてみなさいと諭すのが、神のみこころなのか考えてしまうことがあります。このように、どう祈ったらよいかわからないのです。

祈りというのは、単に私たちの願いを神が叶えることでないことを、私たちは知っています。「1ヨハネ 5:14 何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。」主の御心がこの地上で行われることこそ、私たちの祈りを神が聞かれる理由であって、神の思いが主を愛する者たちの心に置かれて、その願いに基づいて祈る時に、主がそれを実現してくださるという循環があります。けれども、その過程において主が何を行なわれているかが分らないという呻きがあるのです。どう祈ればよいか、分らないという呻きです。例えば、ヨセフのことを思い出しましょう。彼は兄に売られてエジプトで奴隷となりました。そして、ポティファルの妻に言い寄られました。それを拒みました。拒んだことは御心だったのです。ところが、そのことによって彼は牢屋に入れられました。そして牢屋の中にいたパロの献酌官長に自分が出獄できるよう頼んでも、彼は二年間、忘れてしまったのです。

そこで御霊が助けてくださるのは、「言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください」ということです。私たちが心の中で、言いようもない深い呻きがあります。そのような呻きの中で、私たちの内に住まわれる御霊が助けてくださり、それで私たちのために父なる神に対して執り成していただきつつある、ということです。

その最も良い例として、サムエルの母、ハンナの祈りがあります。時は、士師の時代です。一人一人が、自分にとって正しいと思うことを行なっていて、もう滅茶苦茶でした。そこで、主は靈的に回復させるべく、預言者を立てようとお考えになっていました。そこで、「主がハンナの胎を閉じておられた(1サムエル 1:5)」という言葉があります。まるで、もう一人の妻ペニンナのいじめと一緒に、主がハンナをいじているかのように見えます！しかし、ハンナは主の宮に行き、自分の心のうちを神に打ち明けました。ところが、うまく言葉になっていません。それでそれを見ていた、祭司エリがこう言っています。「1サムエル 1:12-13 ハンナが主の前で長く祈っている間、エリはその口もとを見守っていた。ハンナは心のうちで祈っていたので、くちびるが動くだけで、その声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのではないかと思った。」こうやって、彼女は言いようもない、深いうめきを持っていました。

ところが彼女はこう祈ります。「1サムエル 1:11 万軍の主よ。もし、あなたが、はしための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしめを忘れず、このはしめに男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主におささげします。そして、その子の頭に、かみそりを当てません。」ハンナの心が、主の御心に近づき、その心を持って祈ったのです。主のすべてを捧げた子を育てることに、彼女はしました。こうやってサムエルが生まれ、サムエルは幼少の頃から幕屋で育ち、そして神の言葉が与えられ、イスラエルを主に立ち返るのに用いられた器となっていくのです。

これが言いようもない深い呻きの中で、御霊が執り成しをしてくださる例です。そして、言葉にならないほどの祈りについてですが、御霊の賜物の中で異言の祈りがあることも紹介します。パウロは知性だけでなく、異言でも祈り、異言で神に賛美する習慣を持っていました。「1コリント 14:2 異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです。というのは、だれも聞いていないのに、自分の霊で奥義を話すからです。」「14:14-15 もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう。」異言は、自分自身が知性で理解することのできない言語を語ることを意味します。御霊からその賜物が与えられたら、知性の言葉では表現できないような祈りも、主の前で祈ることができます。異言の賜物だけが、言いようもない呻きではありませんが、異言はその一部だということです。

27 人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

ここは、先に話した重要な真理です。私たちは、神の御心が分からないという弱さを持っていますが、御霊は父と一つであられる方で、それゆえに御心に沿って聖徒のために執り成しをすることがおできになります。ですから、父なる神は御霊の思いが何であるかをよく知っておられるのです。ですから、確かに神の御心に沿って祈ることができます。

2A 父なる神のご計画 28-30

こうやって、御霊が私たちが栄光の姿に変えられるまでの過程を助けてくださいます。そして父なる神ご自身がその経過を全て支配しておられ、確実にそのようになるように予め計画してくださっているというのが、28 節から 30 節までの言葉です。

1B 全てを益とされる方 28

28 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益とさせていただきますことを、私たちは知っています。

この約束はあまりにも有名ですが、先ほど紹介したヨセフの生涯において、このことが如実に表れていました。兄が私を売ったという悪を、彼は神のご計画の中で益とされていたことを知りました。そして、そのことに基づいてヨセフは兄たちを心から赦していました。「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。(創世 50:20)」この箇所について、一つ一つ見ていきたいと思えます。

英語でこの箇所を読むと、“We know”から始まります。つまり、「私たちは知っています」から始まるのですが、ギリシヤ語には「知る」には二つの単語があります。一つは、経験的に知っていることです。自分が経験しているので知っています。そしてもう一つは、直感で知っていることです。経験はしていないけれども、「確かにこのとおりだ」と直感で分かっているのです。この箇所では、後者が使われています。つまり直感で知っているのです。「神がすべてのことを働かせて益とさせていただきます」ことを、私たちはもちろんのこと体験することはできません。すべてのことが善であるはずがありません。ヨセフが、兄たちが行なったことについて、「あなたがたは、私に悪を計りました」と言ったように、悪いことは悪いのです。

ですから、キリスト者はくさいものに蓋をするように、悪いものに目を留めないではありません。悪は悪なのです。けれども、人間はそこで「悪が重なり合って、災いが自分に降りかかる」と推測するのです。けれども、私たちは知っているのです。「これらの悪も、神のご計画の中で、善の目的のために使われていくだろう。」と知っているのです。ですから、キリスト者はちょっと複雑な感情を抱きます。悲しいのですが、嬉しいのです。今、経験していること、目で見ていることは悲しいのですが、神を知っているので、神が何かをしておられるという期待感で嬉しくなるのです。言い換えれば、キリスト者は二つのレンズを持っていると言えるでしょう。今まで見てきた物理的な世界の他に、目に見えない神の世界の二つの眼鏡を持っています。神の与えてくださるレンズでは、まったく同じ物でも違う方向に進んでいることを見ることができるのです。

そして神が、すべてのことを働かせて益あるいは善とさせていただきますことは、全ての人に与えられている特権ではありません。「神を愛する人々」です。神を愛して、神に心が開かれているからこそ、

万事が働き益となっていくことを知ることができます。神を知らない人、神を憎んでいる人には悪いことは悪いことで終わるのです。何か悪いことが起こると、神に心を閉ざしている人は神を非難します。「なぜこのような悪いことを神は起こすのか？」と憤慨します。そして「神がしていることは分からない」と疑うのです。けれども、神は無理やり口をこじ開けて、ご自分を受け入れるようにすることはなさないのです。神は、私たちが自分の心を開いた分だけ、ご自分の愛を注いでくださいます。ですから私たちのほうが、神に大きく心を開いていないといけないのです。

そして、どのようにしたら神を愛せるのでしょうか？「神のご計画に従って召された人々」とあります。ヨハネ第一には、「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちに愛し(4:10)」とあります。まず、神が一方向的に私たちに愛して、私たちがキリストにあって選んでくださったからこそ、私たちは神を愛することができるのです。「召された」というのは、神の子供になるように呼ばれた、ということです。神が私たちが、孤児院から自分の養子にするために選び出してくださったのです。この神の愛に応答する者たちが神を愛しており、神を愛している者に神は万事を益とするという働きをしてくださるのです。

そして忘れてはいけないことは、「すべてのことを働かせて」であります。一部ではなく、全てです。神の主権からはみ出している物など何一つないのです。ダニエル書 2 章に、「神は季節と時を変え、王を廃し、王を立て、(21 節)」とあります。どんなに権力をもった支配者であっても、その支配者を動かしておられるのは神ご自身なのです。どんなに、神を脱しているかのような人がいても、その人が神の支配から離れているところか、神に操られている人形にしか過ぎないのです。

私たちは、全てのことに主を認める必要があります。「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。(箴言 3:6)」どんなに悪いことが起こっても、自分に酷いことが襲いかかっても、「主がこのことをされているのだ」と思った時に私たちの心に平安が与えられます。神がそこに関わっておられないと信じるから、残されているのは自分たった独りなのです。それで自分で何とかしなければと思うのですが、どうしようもできないので絶望してしまいます。神は良いことだけでなく、悪いことにおいても主権を持っておられる方です。

2B 御子の形 29-30

29 なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

パウロは、すべてのことを益に変えてくださる、と言いましたが、それは、御子と同じ姿に私たちが変えられることにおいて、そうである、と言っています。私たちがイエスさまの姿にますます似てくるように、神は、すべてのことが働かせてくださいます。ですから、益となると言っても、私たちがお金持ちになるとか、あるいは良い結婚相手に恵まれるとか、学問やスポーツにたける、とか言うものではありません。ちょうどヨセフが、兄たちを最後に赦すというキリストの似姿がそこにはあり

ました。同じように、あらゆることを通して主は私たちを御子の似姿に変えてくださいます。

そして、ここでは、クリスチャンの間で長年の間論争している、神の予定について書かれています。「あらかじめ定める」と書いてあります。神は、人を救いにあらかじめ定められたのなら、私たちの選択は無意味なのか、という議論があります。このようなことを議論することは有益ですが、一つ忘れてはならないことは、神が予定されたことの目的です。ここでは、「御子のかたちと同じ姿に変えられる」という事です。エペソ書においても、「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。(エペソ 1:4)」とありますが、「御前に聖く、傷のない者にしようとされた」という目的が、もっとも大事なのです。

私が神学の授業で、人間の責任と神の選びについて議論がありました。そのときに、先生が、クリスチャンとして教会に通い、奉仕や伝道をし、精力的に働いていた人が、信仰を完全に捨ててしまった人の例をあげました。その人は、救いを失ったのでしょうか。それとも、もともと救われていなかったのでしょうか。その先生の答えは、「だから、何なの？」と言うものでした。救いを失ったにせよ、もともと救われていなかったにせよ、その人は今、罪の中に生きており、悔い改めないなら永遠のさばきを受けるのです。このことのほうが大事であり、神が定められた目的、「御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められた」ことが大切なのです。

そしてもう一つ忘れてはいけない神の真理があります。それは、神が予め定められる前に、「あらかじめ知っておられる人々」とあることです。神が定められる時には、神は予めその人について全てを知っておられます。神は主の御名を呼び求めようとしている人を敢えて頑なにして、滅びに定めるなんていうことはなさらないのです。ましてや、神は予め滅ぼすように定めることについては、その教えはありません。しかし、自分自身で福音を拒む人に対して、最後まで主を受け入れない人に対して、予めそのことを知っておられる神が、無理やりその人を御子に姿に変えるよう定めはしていないことということでもあります。

そして御子が私たちの長子となる、とあります。私たちが神の子供とされたので、もちろん御子と父なる神との関係と、私たちと父なる神はまったく異なりますが、(御子は神ご自身で、私たちは単なる人間ですから)、それでも、神がキリストに対して与えてあるものを、キリストにあつて私たちに与えてくださっています。それでイエス様は私たちを兄弟と呼んで憚らなかったのです。「イエスは彼女(マグダラのマリヤ)に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」(ヨハネ 20:17)」へブル 2 章 11 節から見てもみましょう。「2:11-13 聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」またさらに、「わたしは彼に信頼する。」またさらに、「見よ、わたしと、神がわたしに賜った子たちは。」と言わ

れます。」

これが、栄化であります。父なる神と御子の中にあるその関係を、私たちにも押し流してくださる働きが、「長子」という言葉に含まれます。ですから、キリストの内にある者は、キリストがおられるところに、私たちも立たせられるという恵みの特権を持っているということを知るべきです。ナルニア王国物語で、王なるアスランは四人の子どもたちに王座に着かせました。キリストとの共同相続人であります。このようなことを、御国で神は行なわれます。

30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。

ここで素晴らしいのは、神が「栄光をお与えになりました。」と、過去形で書かれていることです。私たちにとっては、栄光の姿に変えられるのは未来なのですが、時間を超えたところにおられる永遠の神は、キリストにある私たちを見るときに、すでに栄光の姿に変えられているのです。これほど私たちを安心させることはありません。私たちがキリストのうちにいるかぎり、神は私たちを決してお見捨てにはならないのです。神は確実に、救いの働きを貫徹されます。永遠の保障です。

神が予め定めておられて、それで「召す」という働きを初めに行われます。これは、キリストを信じるように召される、ということです。まずここから始まります。神が行われたキリストの贖いの働き、その救いの言葉に应答するよう呼びかけられるのです。その呼びかけに応えることが「信じる」ということであります。ですから、自動的に、私たちの自由意志に反して神が人を救うことではありません。イエス様は、王子の結婚の披露宴の喩えを使われて、「マタイ 22:14 招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」と言われました。そして、信じた者を、神は、「義と認められる」ことをなさいます。私たちは既に、ことについては学びました。神の前に、キリストの犠牲があって正しいと宣言されています。そして「栄光」は、先ほどの体の贖いであり、神の子供の現れのことです。キリストとの共同相続人となることです。

このように、神は栄化されるまでの期間に対して、すべて責任を持っておられます。だからこそ、私たちに対する神の愛は、どんなことがあっても切り離すことはできないのです、という次の話につながります。これは次回学ぶことにしましょう。